

小伊勢物語

^ 13
2908
2



門へ13
2908
巻 2

忠義小伊曾物語二

岳亭定岡戲編

○命の親を撫ささる者病

田平ハさつころ田之助を勘當してよけ
 うことかくこちころううく病がちめて居
 ころころこの不どろ狩さしおのの病おまづ
 行方自由のころとどろとどろと卧てぬころ
 談作ハ大さふまげまの夜昼らさころも森ま

昭和九年
八月六日
購求

田平がまらうのふつとひ脊骨をこき
足をもみで大小便おもむきをひらき
醫者へもおのれが自身もさやう
くくくのべ薬をとり切つてまぐおせんじ
よきふどくおまき人おまきめ抱ぬけあ
く心をこころれが田平が妻の加奈が喜
び大さうのふざおことお人おらるさけをか
けとおくふさのめらう後さくぐ身を投

んとさうをさしはけきしれがこそ後さ
くその恩をおもひてかくおで万支ころを
つて添切おつらめらうとおのひ何ごと
外のものあり相後せむと談作をうら小後
あひ夜も下女をさ先へ森さ女房
加奈と談作とるむづらひの伊曾とやう
ちのこ小吉との入る日ごろ田平が妻おりの
丁稚とて四人してをとおもよく看病



をさしどめ後作小吉そのけう一旅のものをさして
三十五六人品川霜中でおくりゆきと爰あき別
をさつげおろりのものへ歸りたり田平ハ若者
二人をさともふつれ両づけ一荷よりやう何のそ物
も持ぎ都のうこへをさめてるれば先出づけお大
師（まあり）身の災やくをよけさせこゆとい
のりをさめその日ハ神奈川ふやどり次の口ハ船
とくともて大磯ふとあり翌日ハ道不（ごん）かんふ

参詣してその次の日ハ相根のやう三島明
神三保のうらあらひハ秋葉風来寺とさう
くふ参詣しやうやく四月中旬ふあまの国
あぞつらふけ

○能もかゞごの引づく夜通

竹田屋の家ハ主人田平ガ旅立せし苗を井
ハ万吉をんさうがあづらうめて屋敷の庄用店の
高ひるみごとあもそろうをさめりければ後作も

とせむぐふ常つねよらんとやくおき起おきよらん人ひとよつおそ
くあし戸かどのあけさうさう庭にわのさうともと基もと
とらうらうらうらうのさうとあさうとさうらうと
お客きやくのあしらひやななのここと日ひづるふ「あしらひ
あさうと人ひとこのあさをいさしけられら家内うちうちのさう
よろこびあひむつあしとぞつとふらるら志しるらふ
四月しがつのせむあうさう田平でんへいが妻つまの加奈かなふおとら
くさうとせむぐれれど床とこふつとてあしらうらるら談だんさく

おとらうさうさうさうさう醫師いしやへをを早東さうとうおよび
ままりららままをめめひてせんんぐああげこれれをの
あせあをせららのの既痛げつうををめめ足あををささささううててののが
せせををららびびののああんんををららうう薬くすりののびびんんををらら
ひひととららででささままららううののああののふふのの店みせのの用ようそのそのををらら
くくとと信まことややららううののさされれどどもも加か奈ながが病びやうき毒どくのの田でん平へいと
りりととううららううののああままととののああままももああししととらら
ががししとといいひひぐぐららひひ一日いちにちよよけけれれをを一日いちにちああしし三日さんにち

かきとらう

し

祓はらてら二日おこしとくひあつらひおこしし時ときあ
痛いたままいいちち戲あそ場ばででももんんてておおここしし何なにごごもも有あり
ままいいちちれれどど大おほ店いせのの女おんな房ぼうらられればば赤あか松まつ人ひとののままも
ああつつちちののううささややううああももああつつぐぐくく仁にん物ぶつくくささこ
顔かほををししてて居い祓はらををああつつぬぬ身みののうう何なにううここららふ
ままももぬぬここももああつつべべととかかくくぶぶららくくここづづららひひと
ままううゆゆふふとと談だん作さくのの常じょうふふららむむとと朝あさのの字まのの店みせ
のの用もちををままままぐぐととちちややちちととくくとと加か奈なうう脊せ骨ぼね

ううををししててししづづほほううををめめとと茶ちやををののまませせるるどどて
そそれれよよううのの店みせのの商あきなひひををててつつととひひ夜よるもも四よッッま
たたのの店みせふふおおてて四よッッままととらられればば赤あか松まつ人ひとののままももととて
赤あか松まつをを談だんささくくのの奥おくへへととししりり又またもも加か奈なううせせららうう
ままももししててししづづほほううををめめとと茶ちやををののまませせるるどどて
ててららむむととままいいちちれればば加か奈なももここのの赤あか松まつ人ひとののままももととてて四よッッ
ままももたたてて談だん作さくががささししららををししののままももととてて待まちややううららうう
ままももととてて赤あか松まつももふふかか抱かかままるるものののの談だん作さくととここらら

づらひの俵曾と丁稚の小吉とこの三人のよきと
かゝ森あつらむ心まわくくつとつくるふどふ加
奈もひこささうれくぞおもひなる

○癩が治つてあつらおこる悪病

四月のつきもたまきで五月中はふらふれが
暑もどんくやうやうあつらあそ浴衣るどの泣く
借方よりのあつらひの構の歯をひくぐど
く店のせこーさふむらうくこの時をうあ

く地面らちおきこーのめあ合出来ころ是の
先年むんとらう代助がかるをあひころころのれが
針ののめあこころらうむとて番頭め毎日
このかけ合ふ出うけらるがあつらとあつら丁稚の中
でも小吉の心まわくくつとつくるふどふ加
小吉をかりをさともおつれて出行ぬむんとらうの
苗を仲の後作帳場をあづらうとようづらう
あつらふも急外へ一向むらうむらうむらうむらう加奈が病

舞の女抱もどきどきとめり人お小吉の番頭の
ともおゆさそかしらむどその方の侍曾ひとり
加奈がそむをたるとれど何れもをさしきき
あらしも森む女抱ぬけあまなくまわりのかく
まると七日余ふ及びうれがさるとがふらびを
しるやうまるとり今よひも宵より故帳の中
をひり加奈がこゝをさしきりて居るうらがあや
みくこよひに加奈癩をおこしむひおさしぬて

苦しがりうれは侍曾のおどろき小うでのちうら
らうたらし癩をおしそ女抱をやうの女ども
の故屋の御お業るどせんどあつらううが四ツ
まがたふるうらうれも舟をこらうらうやふ立
ものひらうもなうれりま次の写へおひやりて休
めせぬされども侍曾のうひぐく業もあつら
め加奈をさしきりてひらうしてをさしき
がや九ツはさしきあそりのうらうら後作のこよひも

番^{ばん}路^ろが^がか^から^らど^どれ^れが^が勘^{かん}定^{ぢやう}る^るど^どき^きを^をあ^あち^ちが^がい^いど^ど
し^しこ^こひ^ひも^もあ^あし^しあ^あは^はつ^つま^まだ^だふ^ふの^の店^{てん}の^のめ^めの^のを^をが^が
の^のこ^ころ^ろど^どお^お森^{もり}さ^させ^せ談^{だん}作^{さく}ひ^ひと^とり^り帳^{ちやう}場^{ばう}お^おの^のこ^ころ^ろ居^ゐ
て^て翌^{あした}の^のこ^ころ^ろや^やも^もど^どよ^よく^くと^とり^りま^まじ^じら^らべ^べお^おこ^こ夜^よ守^{もり}る^る
こ^ころ^ろお^おや^やう^うく^くお^おか^から^らつ^つけ^けそ^それ^れよ^よう^うと^と興^{おこ}お^おこ^こし^しり^り
見^みれ^れが^が伴^{ばん}曾^{そう}ひ^ひと^とり^りで^であ^あど^どく^くと^として^{して}居^ゐる^るこ^こと^とも
く^くお^お伴^{ばん}曾^{そう}と^との^の店^{てん}苦^くろ^ろう^うせ^せん^んむ^むん^んは^は五^ご七^{しち}日^{にち}の^の
こ^こじ^じう^う多^た用^{よう}そ^それ^れお^お小^{せう}吉^{きち}の^のむ^むん^んと^とう^うど^どの^のへ^へと^とも^もお

わ^わら^らて^て今^{いま}お^おか^から^らつ^つど^どこ^ころ^ろの^のこ^こひ^ひと^とり^りが^があ^あら^らま^まに^に難^{なん}
儀^ぎと^とあ^あく^くま^まさ^さと^とお^おや^やさ^さと^とあ^あれ^れこ^これ^れう^うこ^こと^と
し^しが^がか^かま^まら^らつ^つや^やせ^せう^うと^とら^らひ^ひつ^つ故^こ屋^やの^の中^{ちゆう}へ^へを^をひ
き^きが^が伴^{ばん}曾^{そう}の^のう^うら^らと^とう^うで^で外^{そと}お^おら^らど^どよ^よど^どれ^れの^のめ^めの^のを^を
あ^あら^らふ^ふや^やう^うぬ^ぬれ^れる^るめ^めの^のを^をぬ^ぬら^らふ^ふや^やら^ら女^{にょ}ど^ども^もが
と^とう^うち^ちう^うせ^せ一^{いち}摺^{せん}梳^{くし}小^{せう}あ^あぶ^ぶさ^さう^うさ^さう^うさ^さう^うち^ちら^ら
ふ^ふぬ^ぬら^らひ^ひま^まゆ^ゆら^らむ^むら^らう^うい^いそ^そと^とあ^あら^らへ^へつ^つか^から^らい^いつ^つち^ち
あ^あら^らひ^ひち^ちの^のん^んを^を火^ひを^をら^られ^れて^てう^うち^ちの^のを^をさ^さの^のつ^つこ^こ

あふぶいぬさこのとやにハチのうのひかきとふひびきして
ものさびしく後作ごんさくの加素かそがせるまでおほし
お瘡あざとあぶお狗いぬをささてうかかせうらふ
加素かそよろこびこよひの瘡あざおとらわれ宵よひよう
このおのりさきう休いそ曾そがふうであてらうう
おさめうさきとさきこのちううあてらきづいあし
めささげて下されとあまをむさで寐ねころびぬ
後作ごんさくの加素かそが後あとをささてうらえれが後あとよう狗いぬへ

板いたのごとくささきあつてあてらううさきであ苦く
しと拵あそびううんとそれようごんくともか
ろくろでおうささきとあううて一時あやうも
るふくるさきも休いそ曾そのこの六七日かちがう三人さんあ
れどさきさきあさきあさきさきさきさきさきさきさき
の舟ふねおつれさきつひふるさき居い眠ねをさきさき
あんどろのかさうさきさきさきさきさきさきさき
作さくのさきお終しゆうあさき加素かそがむさきさきさきさき

ておぼろ〜が瘰癧もやうくおぼろ〜とせえ
く後もやう〜うふろのうかちおのよやく〜森入
やうまてさくらおまやくもさう〜やふくね入を
〜と瘰癧作のひとりごち糺もか〜こ愛入のぞ
さまう〜ておぼろ〜が何と〜けん加茶おびつ
く〜て目をさぬ〜おまうらんと〜う〜
後作が顔をこえてそふわらうらう〜う〜
るれが苦〜か〜とあ〜弦さうびてさ〜せ

く〜後作のたぶめのござ〜るまでさまう〜て居
〜るをやあけさつ〜ころ故屋のそとふ
森の〜る俣曾む〜と弦が〜あんどろふ
袖がさう〜て焼心ゆり〜と〜火さ〜て真
暗く〜後さ〜おどろ〜はさ〜りあ〜るがさ
こぞらやちよう〜つけあせ〜と出〜か〜を加茶
さ〜め〜り〜や照〜あ〜ち〜あ〜るがあ〜るのた〜く
ともく〜か〜とそのま〜お捨おら〜て今の通り



さきつて下されとら小徳作^{くさく}破て去る^さる^るは
 とちの^ちあつた^あり^り物^{もの}をさきつ^つる^るをさ^さる^るでさ^さぐ^ぐ
 お癩^{まやく}とらふ^ふの^のの^の愛^{あい}の^のと^ところをさ^さる^るやうお^おかせ
 ぐ^ぐち^ちあ^あつ^つた^たさ^さび^びが^がの^のう^うの^のあ^あつ^つた^たさ^さび^びを^をこの
 やう^{やう}の^のさ^さび^びさ^さつ^つた^たさ^さら^らう^うの^のよ^よの^のめ^めの^のる
 ま^まとして^{して}こ^この^の愛^{あい}と^との^のめ^めさ^さき^きつ^つる^るに^にか^か奈^なも
 不^ふそ^そや^やう^うの^の声^{こゑ}を^をお^おこ^こし^して^てお^お心^{こゝろ}地^ちよ^よく^くる^るう^うく
 癩^{まやく}も^もさ^さき^きつ^つる^るう^うの^のあ^あつ^つた^たさ^さび^びと^とそ^それ^れよ^よう^うの^の明^{あけ}

方^{かた}ち^ちう^うく^くる^るう^うて^て二^に人^{にん}と^とも^も小^こ眠^ねり^りや^や声^{こゑ}も^もせ^せむ^む
 う^うの^のふ^ふく^くう^うの^の愛^{あい}小^こ曉^{あやう}の^のさ^さの^の〜[〜]火^ひを^をさ^さら^らう^うあ^あ〜[〜]
 お^おこ^この^のさ^さび^びの^の〜[〜]を^をお^おく^く懐^{なつか}ま^まむ^むん^んの^のあ^あ〜[〜]べ^べ〜[〜]
 ○お^おつ^つお^お狂^{きやう}言^{げん}か^かき^きゆ^ゆ〜[〜]色^{いろ}悪^{あく}
 田^た平^{へい}が^が妻^{つま}の^の加^か奈^なの^の今^{こん}年^{ねん}と^とも^も五^ご十^{じゅう}歳^{さい}あ^あり
 の^のと^とよ^よう^うの^の淫^{いん}婦^ふあ^あつ^つた^た男^{おとこ}の^のさ^さら^らの^のあ^あつ^つた^たさ^さび^びの^のあ^あ〜[〜]
 家^{いへ}の^の女^め房^{ぼう}を^を〜[〜]と^とも^もさ^さら^らう^うの^のあ^あつ^つた^たさ^さび^びの^のあ^あ〜[〜]
 ぐ^ぐら^らの^のつ^つ〜[〜]と^とも^も居^ゐ〜[〜]と^とも^も去^き年^{ねん}の^の六^{りっ}月^{げつ}と^とも^も

ま田平長病めてこのやどやめで丸で一秘ん
 やめめどろせんめてそのう入田平の六十ちうき
 老人るれが何吉も加奈がころおうるまをどけ
 せつの上京の苗玉中るまをさうころまびく
 て居ころころがらつころは後作と密通して夜
 ごとくまのびあひるまをさるめのもあ
 ざろころを唯この小吉と伊曾へひそく小吉を
 さころろれどころがひふそまろぬ顔しておころ

ころ加奈と後作のあこ伊曾と小吉が邪魔
 おろるめをばごころの四ツの鐘ころを小吉も
 伊曾もやさめとして寐さしてまのひ後さく
 ひとり四ツころころ加奈が脊をるまで肩をゆ
 九ツハツやめやおとごころまをさる何をさるやう
 ころころと定めておめころころるべく突
 あも阿古木ころころの細志のぶとさろれど人の目
 おつひめかころとあつと番頭を代がかがつ

けでこれいゝぬと肉々相後あひく〜う〜う鬼と
角かく主人まぢん田平でいなるは具員ぐいんの後ごんさ〜るればお
苗な至さい中ちゆうおさやかくらぶとよろし〜かぶお〜
は主人しゆじんなる一日いちにちもさ申まをくお〜う〜いよ〜い〜
おき紙しをまつら〜田平でいなるお〜う〜の上
あ〜い〜い〜肉々にくくお〜なる〜
も〜らぶ〜とそれそれより番代ばんだい助すけう〜より
六日むつきぶりの早はや快かいめて〜い〜い〜あ合あひの筋すぢこれ

あ〜い〜い〜早はや東とうは帰かへ府ふあ〜い〜と田平
が方かたへあ〜い〜う〜い〜い〜い〜このこと番代
も代しろあ〜い〜人のやうやう催もよほあもい〜い〜い〜
をい〜い〜とさ〜い〜い〜加か素そこのことことをい〜い〜
い〜い〜あ〜夜よひとふ後ご作さくおらひ〜い〜い〜
田平でいどのか〜い〜る〜い〜今いまのど〜い〜い〜い〜
〜い〜夜よごと〜い〜い〜む〜い〜い〜い〜
い〜い〜身みと夫おつ婦ふふ〜い〜い〜この家いへを〜い〜い〜

ちり今よるもふをいひのしんでくじいおも
 ありの何ぞよる思案するもいひのやけん
 發作まてまがく考へ作のいひい
 もこのお家をおのひまういひい
 夫婦ふるいひいこの上なるもいひい
 ういひい田平なるもいひい
 ぬのいひい夜女のいひい
 一兎角田平なるのおいひい

小いときがうく考へいひい道中お
 て田平なるを殺してまやの盜賊のいひい
 披あしてことをいひいちおをいひい
 よる跡目のいひい後さくお相續るいひい
 まいと役人がいひいをいひい夏成乾
 まるふるいひいこれようふいひい
 むいひいやいひいいひい加奈
 いひい道中よういひい一刻もをいひい

さういふべしきさういふ道中にて田平どのを
むらさき仕法もむづろかさんその子腹を
いづろのや強作やそこ志がうく考へやあ
つてあつこところひよたことをおのひら
さあつろ奴前こところが苦を後忍のん方
おきかかしてひせらう借入ふこのとおさ
歡八とやのめらさうころかろぬとあり
て當地を逃奔しつて今ある中の雲助と

うろて居るよ先日手紙をゆつてころ
へ方へ金子のむしんあつて来りひいとも
今あつて返すもらしておさひとさういふ
幸ひるれがこの歡八をきふよびよせこの
こところくたのそる申あて田平どのを
殺しられよこところが多分の金子をあて
へんとあつてさうの歡八一をころころと
と必死ころのかり田平どのを殺して跡の

とやうにもむづう〜か〜い〜やうにふ〜い〜ま〜仕
法りゆうそれらの歡くわんハ子とくとカ〜あ〜あひ〜
あ〜おや〜い〜さあより（あ〜め）かんさ目めをざんさ後作ふとあをせ
つけらる仕法しりゆうこれのひとく〜ふ〜う〜あ〜ん〜
お〜う〜む〜ご〜無りそい〜でくわん歡ハをよびよせるまで
が仕しご〜お〜さ〜ら〜う〜とら〜があ〜み加か素すゆ〜て〜え〜お
〜ら〜び〜き〜う〜が〜一いつ刻こくを〜申まをくよびて〜のむ〜
〜とら〜お〜ぞ〜さ〜ら〜う〜と〜その夜よら一封いつぽうの書状まよを

ま〜く〜めお〜さ〜その翌よく日ひひそふ人をこのこ
この書状まよをの〜せら〜と〜ぞくわん歡ハをよびふ
つ〜い〜〜

忠義ちゆうぎ小伊こい曾そ物語ものがたり二終



武蔵

武蔵野の原野に
花の散るるを
見れば心も
なほなほ

小の巻二

十一

